

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2007～2010

課題番号：19202013

研究課題名(和文) 人物像に応じた音声文法

研究課題名(英文) Grammar of Spoken Language based on "Characters"

研究代表者

定延 利之(SADANOBU TOSHIYUKI)

神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授

研究者番号：50235305

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語にどのようなしゃべり方があり、それぞれどのような人物像によって発話されているかを調べることにより、日本語の音声言語の教育に役立つ基礎資料を作成するものである。MRI装置と自然会話記録を用いて、日本語の音声言語を、調音と発話行為の両面にわたって調べ、人物像に応じた音声文法の基礎資料を作成した。さらに、人物像という半意図的な概念が従来の目的論的な発話行為論と文法を改良する上で有用なものであることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This project aims at making basic materials for teaching spoken Japanese language, by investigating the ways in which speaking is conducted by the speaker's "characters" in Japanese communication. Based on MRI experiments and natural conversation collection, the materials consist of detailed descriptions of articulatory and communicative aspects of various Japanese speech acts in accordance with the speaker's "character." Also it was demonstrated that the semi-intentional conception of "character" can be utilized to improve traditional teleological speech act theory and grammar.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	9,100,000	2,730,000	11,830,000
2008年度	8,100,000	2,430,000	10,530,000
2009年度	8,600,000	2,580,000	11,180,000
2010年度	8,200,000	2,460,000	10,660,000
年度			
総計	34,000,000	10,200,000	44,200,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語、音声言語、人物像(発話キャラクタ)、調音動態、自然会話、コミュニケーション、日本語教育、国語教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 文字言語研究の隆盛の中で傍らに迫いやられていた音声言語に対する、近年の関心の高まりは、研究開始当初には、国内外を問わず、個々の学問分野を超えた大きなうねりとなっていた。より具体的には、
①文法の分野では、チェイフが言語の動的過

程説を論するなど、音声言語に対応できる動的な言語観が急速に浸透してきていた。

②また、音声科学・情報処理の分野では、「感情音声」というキーワードのもと、よりリアルな発話が注目されるようになっていた。

③さらに、教育の分野においても、音声分析ソフトやMRIによる調音動態発音資料が日本

語教育や国語教育で注目され始めていた。

(2) このような音声言語研究のうねりの中で定延らは、2004年度～2007年度に基盤研究(A)「日本語・英語・中国語の対照に基づく、日本語の音声言語の教育に役立つ基礎資料の作成」を進めていた。本課題はこの研究の最終年度前年度申請によるものであるため、この研究の趣旨を簡単に説明しておく、日本語と代表的な外国語である英語・中国語を、特に音声言語の面で比較対照させることによって新しい知見を得、これまでの日本語の音声言語教育を向上させる基礎資料を作る」というものであった。「人物像」という新しい問題意識は、この研究を進める中で浮上してきたものである。

(3) 一言でいえば「人物像」とは、「らしさ」ということである。音声言語の研究を進めるうちに、態度や感情とは別に、子供らしい話し方、男らしい話し方、女らしい話し方といった「らしさ」の考察が必要ではないかという問題意識である。

もちろん、「～らしい話し方」のうち一部分は、地域や世代、性別などの差として調べられてはいたが、たとえば「高倉健」と「愛川欽也」では話し方が大きく異なるというイメージがあるように、人物像は社会的属性の違いだけではとらえきれない。

人物像はこれまで光がほとんど当てられていないので、この部分を集中的に研究することによって、よりリアルな音声言語の文法をつかめるのではないかという認識が、前記科研の中で浮上してきた。

2. 研究の目的

以上の認識のもと、上記の基盤研究をさらに効果的に進めるための最終年度前年度申請をおこない、認められたものが本課題である。したがって本課題は上記の基盤研究の性格を大きく受け継いでいる。

本課題の目的は「英語や中国語との対照のもと、日本語の音声言語の教育に役立つ基礎資料を作成する」というものであり、ここに「人物像という観点」を導入することによって、目的のさらに効果的な遂行をねらったものである。(基礎資料とは教材の一步手前のもので、より詳しい説明は4で述べる。)

3. 研究の方法

研究の方法についても本課題は上記の基盤研究から多くを受け継いでいる。具体的には方法は大きく2つに分かれている。

(1) 1つは、MRI装置(体内の動きを撮影するもので診察用に病院などに設置されているものがよく知られている)を用いて、口腔内での調音運動の動態を撮像し、観察の上、編集し、解説を付けて調音動態撮像資料を作成するという方法である。この方法を用いて、

日本語母語話者の日本語発話だけでなく、英語母語話者の英語発話や日本語発話、中国語母語話者の中国語発話や日本語発話のデータをも収録・活用した。

(2) もう1つは、会話の音声と映像を目立たない形で収録する小型のビデオカメラ等を用いて、学生にかぎらず社会人の自然会話を収録し、観察、編集の上、解説を付けて自然会話資料を作成するという方法である。この方法では、日本語母語話者どうしの会話だけでなく、日本語母語話者－中国語母語話者や、日本語母語話者－英語母語話者のデータをも収録・活用した。

(3) もっとも、これら2つの方法は相互に排他的なものではない。たとえば「口をとがらせる」のような特定の話し方は、調音はMRI資料で、コミュニケーションな「機能」は自然会話資料で学べるというように、両方の方法は最終的に組み合わせることができるものである。

4. 研究成果

(1) 調音動態については、上記「口をとがらせる」や「口をゆがめる」のような、特定の人物像による話し方について実験によって知見を得るとともに、日本語共通語の代表的な発音を「人物像」に偏らないという形で明らかにして基礎資料を作成、CD配布で公開した。

基礎資料とは前述のとおり、教材の一步手前に位置づけられるものである。基礎資料の作成を本課題の目的としたのは、教材は教育機関によって必要な教材がまちまちで断念せざるを得なかった次第だが、我々の作成した基礎資料を使用して、外部の教育機関(国際交流基金)が調音の教材『音声を教える』を作成したのは(その旨168ページに明記)を作成したのは、基礎資料に対する高評価の現れとすることができるだろう。執筆者(磯村一弘氏)を講師としたこの教材の講演会(2010年10月3日、於関西学院大学)は参加者が百名を越え、多くの反響を得た。

(2) 他方、自然会話については、
①連携研究者ニック・キャンベル氏の協力によって、基礎資料として120分に及ぶ様々な話者の発話音声、動画、文字、発話時間情報付きの自然会話データベース“KOBE Crest FLASH”の形でインターネット上に公開した(<http://www.speech-data.jp/ta/aba/kobedata/>)。

②また、人物像の導入によってこれまでの文法や発話行為論を大きく発展させるための新しい知見を得た。一人の話し手がさまざまな場面や状況の中で話す音声言語に、驚くほどのバラエティがあるということは、以前から知られていたが、これを説明する考えとしては従来「スタイル(style)」あるいは「人

格(personality)」といった概念しか用意されていなかった。だが、音声言語の詳細な実態観察を通して得られたのは、スタイル以上、人格未満で、半意図的な「人物像」という概念が日常的発話のいたるところに必要というものである。ごく一例を挙げれば、「それでよ、事務所をよ」という一節を、末尾「よ」を上昇調イントネーションで発するのは上品な女性、末尾「よ」を高く上げて下げるのは下品な男性、感動詞「あら」を下降調で言うのは上品な女性という形で、人物像が音声文法に深く関わっていることを具体的に示した。さらに、このような人物像の半意図的な性質が、発話に伝達意図を前提とする多くの発話行為論にとって問題となることを示した。

(3) 以上の成果を辞書出版社(三省堂)のホームページで一般向けに連載する機会を得、(<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/sadanobu/>)、連載100回を機に改稿の上、基礎資料として出版した(『日本語社会のぞきキャラくり』)。この連載は好評を得て英語版・中国語版も連載中である。

(4) さらに、シンポジウム3回、ワークショップ3回、講演会1回、研究集会2回、研究打ち合わせ30回を通じて若手研究者育成につとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計43件)

- [1] 定延利之、コミュニケーション研究からみた日本語の記述文法の未来、日本語文法、査読有、11巻2号、印刷中
- [2] 定延利之、羅米良、文法・パラ言語情報・キャラクタに基づく日本語名詞性文節の統合的な記述、Journal CAJLE、査読有、12、印刷中
- [3] Toshiyuki Sadanobu, and Andrej Malchukov, Evidential extension of aspecto-temporal forms in Japanese from a typological perspective, Cahier Chronos, 査読有、23, 2011, 141-158.
- [4] 定延利之、会話においてフィラーを発するということ、音声研究、査読有、14巻3号、2010、27-39
- [5] 定延利之、「た」発話をおこなう権利、日本語/日本語教育研究、査読有、1巻、2010、5-30
- [6] 朱春躍・波多野博頭、MRI動画撮像により観測した日本語音節連鎖における調音結合、音声研究、査読有、14巻2号、2010、45-56
- [7] 定延利之、日常の音声コミュニケーションをめぐる研究の展開、岡田浩樹・定延利之(編)『可能性としての文化情報リテラシー』ひつじ書房、査読無、2010、127-137

[8] モクタリ明子、ニック・キャンベル、田畑安希子、表現豊かな自然発話コーパスのアクセスについて、第15回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」発表論文集、査読有、2010、15-20

[9] ニック・キャンベル、マルチモーダルな会話データの収集と処理、岡田浩樹・定延利之(編)『可能性としての文化情報リテラシー』ひつじ書房、査読無、2010、111-126

[10] モクタリ明子、ニック・キャンベル、人物像に応じた個人内音声パリエーション、岡田浩樹・定延利之(編)『可能性としての文化情報リテラシー』ひつじ書房、査読無、2010、139-156

[11] ニック・キャンベル、日常会話における気持ちの伝え方、林博司・定延利之(編)『コミュニケーション、どうする?どうなる?』ひつじ書房、査読無、2010、114-137

[12] ドナ・エリクソン、昇地崇明、パラ言語情報にみられる異文化間の知覚の相違、林博司・定延利之(編)『コミュニケーション、どうする?どうなる?』ひつじ書房、査読無、2010、138-153

[13] 朱春躍、構音の面から見た中国語話者の日本語5母音の習得、林博司・定延利之(編)『コミュニケーション、どうする?どうなる?』ひつじ書房、査読無、2010、154-176

[14] 犬飼隆・成田道子、名古屋言葉絵葉書の書誌的研究、国際文化研究科論集、査読無、第11号、2010、49-67

[15] 定延利之、音声・文字と表現、糸井通浩・半沢幹一(編)『日本語表現学を学ぶ人のために』世界思想社、査読無、2009、118-131

[16] 砂川有里子、コーパスを活用した日本語教育研究、人工知能学会誌、査読有、24巻5号、2009、656-664

[17] 砂川有里子、清水由貴子、奥川郁子、コーパスを用いた類義語研究、日中言語研究と日本語教育、査読有、2号、2009、21-33

[18] 定延利之、研究領域への扉 第一回 日本語学 体験の文法、月刊日本語、査読無、22巻4号、2009、70-73

[19] 坂井康子、日本語の韻律の獲得—母子間で交わされた3拍の唱えことばの抑揚、表現文化研究、査読有、第8巻第2号、2009、85-97

[20] 朱春躍、応答詞“ng、うん、ううん”肯定、否定語調的由来初探、李慶祥(主編)・魏曉艷・張韶岩(副主編)『中日非語言交際研究』外語教学与研究出版社、査読無、2008、235-245

[21] 定延利之、りきむ権利・りきむ義務、日本語学、査読無、27巻5号、2008、178-185

[22] 定延利之、知識修正の「た」と権利の問題、査読有、北京大学日本語文化系・北京大学日本文化研究所(編)『日本語文化研究』学苑出版社、8輯、2008、173-181

[23] 定延利之、「表す」言葉から「する」言葉へ、張威(主編)『日本語文化研究：日本学框架与国際化視角』清華大学出版社、査読無、2008、109-115

[24] 定延利之、伝達の構図にはまらない丁寧さ、文学、査読無、9巻6号、2008、51-61

[25] 友定賢治、于康、定延利之、「舌打ち」の日中対照研究に向けて、李慶祥(主編)・魏曉艷・張韶岩(副主編)『中日非語言交際研究』外語教学与研究出版社、査読無、2008、200-214

[26] 定延利之、空気すすりの日中対照に向けて、李慶祥(主編)・魏曉艷・張韶岩(副主編)『中日非語言交際研究』外語教学与研究出版社、査読無、2008、215-234

[27] 定延利之、日本語研究と海外の言語研究のコラボレーション、日本語学、査読無、27巻14号、2008、28-38

[28] 朱春躍、汉语表情话语中的調值改变及其感知、中国語音学报、商務印書館、査読有、1輯、2008、228-235

[29] 杉藤美代子、話し言葉の音声、日本語学、査読無、27巻5号、2008、8-15

[30] 杉藤美代子、音声言語研究の醍醐味、音声言語、査読無、第6巻、2008、1-4

[31] 金田純平、澤田浩子、定延利之、コミュニケーション・文法とキャラクターの関わり、言語、査読無、37巻1号、2008、52-59

[32] 定延利之、友定賢治、コミュニケーションの形態と発話キャラクター、譚晶華(主編)『日本学研究：2007年上海外国語大学日本学国際研討会論文集』上海外語教育出版社、査読有、2007、26-31

[33] 定延利之、発見の「た」と発話キャラクター、言語、査読無、36巻12号、2007、40-47

[34] 定延利之、キャラ助詞が現れる環境、金水敏(編)『役割語研究の地平』くろしお出版、査読無、2007、27-48

[35] 定延利之、「議論型」から「体験談型」へ共感する“やりとり”の重要性—「話し言葉のコミュニケーション」を考える、ベルシステム24総合研究所(編)『交感する科学—ビジネスを深化させる最先端コミュニケーション研究—』ベルシステム総合研究所、査読無、2007、70-89

[36] 定延利之、話し手は言語で感情・評価・態度を表して目的を達するか?—日常の音声コミュニケーションから見えてくること—、自然言語処理(言語処理学会)、査読有、14-3、2007、3-15

[37] 定延利之、“相互作用的語法与帰属的語法”張黎・古川裕・任鷹・下地早智子(主編)《日本現代漢語語法研究論文選》、査読有、2007、380-391

[38] 定延利之、友定賢治、朱春躍、米田信子、レキシカルな韻律とフレーザルな韻律の関係—日本語共通語・新見市方言・中国語・

マテング語の対照—、定延利之・中川正之(編)『音声文法の対照』くろしお出版、査読無、2007、15-53

[39] 定延利之、日本人が空気をすするとき、定延利之・中川正之(編)『音声文法の対照』くろしお出版、査読無、2007、129-147

[40] 朱春躍・本多清志、日本語/aN/と中国語/am, ang/における生成および知覚上の相違、定延利之・中川正之(編)『音声文法の対照』くろしお出版、査読無、2007、183-211

[41] 友定賢治、否定応答詞の方言間対照、定延利之・中川正之(編)『音声文法の対照』くろしお出版、査読無、2007、79-91

[42] 林良子、外国語音声に見られるポーズと流暢性の分析、定延利之・中川正之(編)『音声文法の対照』くろしお出版、査読無、2007、169-182

[43] 中川明子、澤田浩子、音声コミュニケーションにみられる発話キャラクター、定延利之・中川正之(編)『音声文法の対照』くろしお出版、査読無、2007、149-168

[学会発表] (計42件)

[1] 定延利之、[基調講演] 状況に基づく日本語話しことばの文法、第12回フランス日本語教育シンポジウム、2011年5月13日、ボルドー第3大学

[2] 定延利之、[招待講演] 日本語社会とキャラクター、日本学研究センター日本学総合講座、2010年12月16日、北京外国語大学

[3] 羅米良・定延利之、日本語教育における副詞の習得に役立つ人物像の導入について、世界日本語教育大会2010、2010年8月1日、台湾国立政治大学

[4] Erickson, D. More about jaw, rhythm and metrical structure. 日本音響学会2010年秋季研究発表会、2010年9月16日、関西大学

[5] 林良子、[招待講演] 表現力豊かな日本語・外国語音声の産出と習得、日本音響学会音声・聴覚研究会、2010年3月4日、芝浦工業大学

[6] 阿栄娜、林良子、シャドーイング練習による日本語発音の変化、日本音響学会音声聴覚研究会、2010年3月4日、芝浦工業大学

[7] 定延利之、[招待講演] 「言語学概論」の理念と方法論、日本言語学会第139回大会公開シンポジウム、2009年11月29日、神戸大学

[8] 定延利之、[招待講演] ことばと音声コミュニケーション、2009年11月19日、甲陽学院中学校(兵庫)

[9] 定延利之、[基調講演] 「体験」概念の意義と可能性、国際シンポジウム 認知言語学の拓く日本語・日本語教育の研究と展望、2009年10月17日、北京大学(北京)

[10] 安田麗、林良子、日本語学習者における

る母音無声化の出現—台湾人日本語学習者、東京・近畿方言話者を対象に—、第23回日本音声学会全国大会、2009年9月27日、九州大学

[11] 定延利之、[招待講演] コミュニケーションと言語における「体験」、日本認知科学会第26回大会、2009年9月10日、慶應義塾大学

[12] 中村淳子、林良子、英語母語話者と日本人学習者の調音に関する研究：MRI 動画を用いた観察、外国語教育メディア学会 (LET)、2009年8月5日、流通科学大学

[13] 定延利之、[招待講演] 日本語のコミュニケーション行動と、文法・音声、2009年3月6日、関西 OPI 研究会 10 周年記念大会、2009年3月21日、南明ホテル (熱海)

[14] 定延利之、[招待講演] コミュニケーションと文法におけるキャラクタ、2008年12月15日、華中科技大学 (武漢、中国)

[15] 定延利之、感動詞ときもちの結びつきの明確化に向けて、中国日語教学研究会年会暨日語教育・日本学研究国際学術研討会、2008年12月13日、広東外語外貿大学

[16] 朱春躍、日本語「ユ」と中国語youの生成に関する対照研究、中国日語教学研究会年会暨日語教育・日本学研究国際学術研討会、2008年12月13日、中国・広東外語外貿大学

[17] 砂川有里子、物語会話の直接引用におけるプロソディと声の質、談話分析コロキウム、2008年11月8日、山形テルサ (山形)

[18] Sadanobu, Toshiyuki. How does spoken language differ in grammar and communication from written language?, Developing New Methods and Resources for Processing Written and Spoken Language, 2008年10月30日, Kobe University.

[19] 友定賢治、A study on HATSUWASHI in Japanese conversation, EAJS、2008年9月21日、レッチェ (イタリア)

[20] 澤田浩子、Prosody and voice quality in quotation and stereotypical character, EAJS、2008年9月21日、レッチェ (イタリア)

[21] Ryoko Hayashi、Acquisition of Dis-fluency Markers in Japanese: An Analysis of Foreign Sumo-wrestlers' Speech, the 12th EAJS、2008年9月21日、サレント大学 (イタリア)

[22] 砂川有里子、How people talk in spontaneous conversation: Multiple voices expressed by Japanese direct speech, EAJS、2008年9月20日、レッチェ (イタリア)

[23] 磯村一弘、林良子、中村淳子、朱春躍、MRI動画による日本語調音の映像資料、日本音声学会全国大会、2008年9月15日、明海大学

[24] 定延利之、[招待発表] 知識の文法と体験の文法、The Association of Japanese Language Teachers in Europe 主催、The 13th Symposium on Japanese Language Education in Europe, 2008年8月28日、Troy Culture Centre, Canakkale Onsekiz Mart University (Turkey)

[25] 定延利之、[招待講演] 日本語のことばとキャラクタ、The Association of Japanese Language Teachers in Europe 主催、The 13th Symposium on Japanese Language Education in Europe, 2008年8月27日、Troy Culture Centre, Canakkale Onsekiz Mart University (Turkey)

[26] 林良子、ふつうの発音について、日本語音声コミュニケーション教育研究会ワークショップ「人物像と日本語教育」、2008年7月24日、神戸大学

[27] Sadanobu, Toshiyuki. Two ways of reacting politely to an unattainable request in Japanese, 4th International Symposium on Politeness, 2008年7月4日, Research Institute for Linguistics, Hungarian Academy of Science (Budapest, Hungary)

[28] 定延利之、[シンポジウム発題] 日本語教育から見た言語と研究—キャラクタは言語をどこまで変えるか?—、日本語教育学会2008年度春季大会シンポジウム、2008年5月24日、首都大学東京

[29] Sadanobu, Toshiyuki. [招待講演] Cultural differences of preferred communication type; how can we react politely to unattainable requests?, 2008年4月22日、Laboratoire Grenoble Images Parole Signal Automatique, Grenoble University (France)

[30] 中村淳子、林良子、朱春躍、MRI 動画を用いた英語母音の観察—日本語話者による発音—、日本音響学会春季研究発表会、2008年3月18日、千葉工業大学

[31] Erickson, Donna, Takaaki Shochi, Caroline Menezes, Hideki Kawahara, and Ken-ichi Sakakibara, A comparison of perception by Japanese and American listeners to some non-F0 cues to emotional speech, 国際シンポジウム「日本語「音声言語」の教育と基礎資料」、2007年12月9日、神戸大学

[32] 中村淳子、林良子、朱春躍、MRI動画を用いた日本人話者による英語母音の観察、国際シンポジウム「日本語「音声言語」の教育と基礎資料」、2007年12月9日、神戸大学

[33] Campbell, Nick, Technology and Techniques for Talking Together, 国際シンポジウム「日本語「音声言語」の教育と基礎資料」、2007年12月9日、神戸大学

[34] 澤田浩子、発話キャラクタと『社交』—他者のキャラづけと自己のキャラづけ—、国際シンポジウム「日本語「音声言語」の教育と基礎資料」、2007年12月9日、神戸大学

[35] 林良子・坂井康子・安田麗、『正しくない発声』とは、国際シンポジウム「日本語「音声言語」の教育と基礎資料」、2007年12月9日、神戸大学

[36] 定延利之、[講演]共感するコミュニケーション—組織を強くするコミュニケーション、ベルシステム 24 エグゼクティブセミナー、2007年10月26日、帝国ホテル大阪

[37] 定延利之、澤田浩子、発話キャラクタに応じたことばづかいの研究とその必要性、2007年度日本語教育学会秋季大会、2007年10月7日、龍谷大学

[38] 定延利之、自然発話データに基づく、日本語「戻し付きの末尾上げ」の観察、2007北京中日教育文化国際フォーラム、2007年9月22日、北京外国語大学

[39] Sadanobu, Toshiyuki, Japanese leap-and-fall intonation as a revelation of feeling of termination, NAJAKS 2007, 2007年8月25日, Copenhagen University

[40] 定延利之、[講演]日本語の音声文法と教育、名古屋YWCA日本語教育セミナー、2007年8月4日、名古屋YWCA

[41] 定延利之、空気すすりの日中対照に向けて、2007中日非言語コミュニケーション研究国際シンポジウム、2007年5月25日、中国海洋大学

[42] 友定賢治、于康、定延利之、「舌打ち」の日中対照研究、2007中日非言語コミュニケーション研究国際シンポジウム、2007年5月25日、中国海洋大学

[図書] (計7件)

[1] 定延利之、三省堂、日本語社会のぞきキャラくり、2011、208

[2] 杉藤美代子(編)、くろしお出版、音声文法、2011、272

[3] 朱春躍・中川正之、白帝社、はじめての中国語 発音・入門編、2011、66

[4] 朱春躍、くろしお出版、中国語・日本語音声の実験的研究、2010、242

[5] 定延利之、筑摩書房、煩惱の文法、2008、200

[6] 朱春躍、中川正之、白帝社、発音重視型はじめての中国語、2008、108

[7] 定延利之、中川正之(編)、くろしお出版、音声文法の対照、2007、224

[その他]

ホームページ

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/products/nihongo/pubs.html>

テレビ取材協力 (NHK 教育テレビ『からだの

ちから 第3回 声は気持ちのメッセージ』、2007年10月20日放映。テロップ有り) 新聞取材 (神戸新聞 2007年12月14日、12月25日)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

定延 利之 (SADANOBU TOSHIYUKI)
神戸大学・国際文化科学研究科・教授
研究者番号：50235305

(2) 研究分担者

キャンベル, ニック (Nick Campbell)
奈良先端科学技術大学院大学・情報科学研究科・教授
研究者番号：50395109

(3) 連携研究者

犬飼 隆 (INUKAI TAKASHI)
愛知県立大学・日本文化学部・教授
研究者番号：20122997

エリクソン, ドナ (DONNA ERICKSON)
昭和音楽大学・音楽学部・教授
研究者番号：80331586

坂井 康子 (SAKAI YASUKO)
甲南女子大学・人間科学部・教授
研究者番号：30425102

匂坂 芳典 (SAGISAKA YOSHINORI)
早稲田大学・国際情報通信研究科・教授
研究者番号：70339737

澤田 浩子 (SAWADA HIROKO)
筑波大学・人文社会科学部研究科・講師
研究者番号：70379022

朱 春躍 (SHU SHUNYAKU)
神戸大学・国際コミュニケーションセンター・教授
研究者番号：80362755

杉藤 美代子 (SUGITO MIYOKO)
大阪樟蔭女子大学・学芸学部・名誉教授
研究者番号：10082455

砂川 有里子 (SUNAKAWA YURIKO)
筑波大学・人文社会科学部研究科・教授
研究者番号：40179289

友定 賢治 (TOMOSADA KENJI)
県立広島大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：80101632

林 良子 (HAYASHI RYOKO)
神戸大学・国際文化科学研究科・准教授
研究者番号：80182278

松井 理直 (MATSUI MICHINAO)
大阪保健医療大学・保健医療学部・教授
研究者番号：00273714

森山 卓郎 (MORIYAMA TAKURO)
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：80182278